

写真展企画 展示構成（案）

## 昭和館写真展

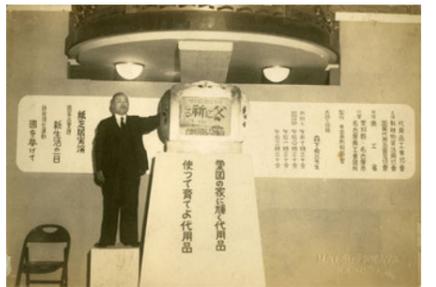
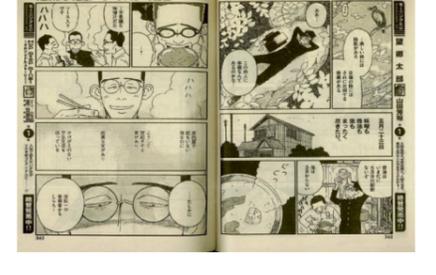
「マンガ『風太郎不戦日記』を通して知る戦時下のくらし」

会期：令和3年3月20日（土）～5月9日（日）

会場：昭和館 2階ひろば

	ごあいさつ	著者の紹介		
<p>・令和3年春期写真展タイトル 昭和館写真展 「マンガ『風太郎不戦日記』を通して知る戦時下の暮らし」</p> <p>・会期 令和3年3月20日(土)～5月9日(日)</p> <p>・パネル展示(すべてモノクロ) 中パネル:500mm×400mm 40点</p> <p>・マンガ紙面展示 館内作成パネル:600mm×500mm 10点</p> <p>・後援 千代田区 千代田区教育委員会</p> <p>・協力 講談社</p>	<p>作家 山田風太郎は、『戦中派不戦日記』と題して、昭和20年(1945)の自身の体験を記録しています。</p> <p>この『戦中派不戦日記』が漫画家の勝田文さんにより、『風太郎不戦日記』とタイトルを改め、ユーモアを交えて漫画化されました。</p> <p>このたび昭和館は、漫画化にあたっての監修に携わりました。</p> <p>当時の日本は戦時下であり、同世代の若者たちが戦地へ赴くところ、風太郎は体調不良により召集を見送られ、葛藤を抱えながらも、終戦の年に起きた出来事を、若者らしい視点で、見て感じたありのままを記録しています。</p> <p>本展の前半は『風太郎不戦日記』の誌面を通して戦時下の暮らしを、また後半では「男子学生たちの青春」と称して風太郎と同時代に生き、戦争に青春時代を翻弄された男子学生たちの姿を、昭和館の所蔵写真からご紹介いたします。</p>	<p>■原作:山田風太郎(やまだふうたろう) 本名は山田誠也(やまだせいや)、大正11年(1922)兵庫県養父郡関宮村(現・養父市)生まれ。</p> <p>昭和10年(1935)豊岡中学校(現・兵庫県立豊岡高等学校)に入学、15年に卒業したものの17年8月に家出同然で上京。同年には徴兵検査を受けるが、体調不良のために丙種合格とされ入隊を免れる。品川の軍需工場で働きながら受験勉強を続ける。</p> <p>19年に旧制東京医学専門学校(現・東京医科大学)に合格。在学中の22年、『達磨峠の事件』で作家デビュー。25年に卒業、その後は作家として本格的に活動。</p> <p>33年に『甲賀忍法帖』を皮切りとする忍法帖シリーズ、46年に『戦中派不戦日記』を刊行。平成13年(2001)7月28日、79歳で逝去。</p> <p>■漫画:勝田文(かつたぶん) 愛知県出身。平成10年(1998)に集英社「YOUNG YOU」でデビュー。</p> <p>主な作品に『マリーマリーマリー』『小僧の寿し』(以上、集英社刊)、『ブリーズ、ジーヴス』(原作 P・G・ウッドハウス/白泉社刊)など。</p>	<p>風太郎不戦日記にみる戦時下の暮らし</p>	<p>第一話</p>  <p>第一話『銭湯』は、昭和20年(1945)元旦の情景からスタートします。19年の大晦日から翌20年の元旦にかけ、東京のまちは空襲に見舞われます。</p> <p>目黒区下目黒の高須家に下宿していた山田風太郎青年は、高射砲の音が夜間に鳴り響くなか、退避を促されるも自宅で布団に入ったままです。</p>
1.元旦の空襲被害(1)	2.元旦の空襲被害(2)	3.国民学校に避難した人びと		第二話
 <p>昭和20年(1945)の元旦は、空襲で明けた。まだ煙がくすぶる中、警察署員たちが焼け跡の整理にあたっている。</p>	 <p>空襲は前日の大晦日から始まり、千代田区末広町や台東区蔵前にかけてのエリアが被害をうけた。新年早々、家を失ったであろう住民が、焼けあとに茫然と立ち尽くしたり、片付けに追われる姿が見える。</p>	 <p>千代田区元佐久間町(現・千代田区外神田五丁目)付近の国民学校の様子。元旦の空襲後、焼け出された人びとは最寄りの国民学校などへ避難した。</p>	<p>これらの写真を撮影した石川光陽は、当時警視庁本庁で勤務し、写真係として空襲による被災状況を撮りつけ、自身の日記にも記録を残しています。</p> <p>昭和二十年一月一日 曇 元旦早々凡(すべて)を灰燼(かいじん)に帰せしめられた罹災者の方々に対しては、全く同情の言葉もなく、一夜にして裸一貫となった人々は、最寄りの国民学校の教室に寄り添って、お互いの昨夜の模様を語り合っていた。</p> <p>現場は余燼(よじん)未だ消えやらず、至る処に白煙濛々(はくえんもうもう)としてあがり、その中を罹災の人々が老も若きも我が家の焼跡を黙々と掘っている。所轄の署員も昨夜来一睡もせず、防空に消火に懸命の努力を捧げて、顔も手も制服も泥と灰で真っ黒だ。</p> <p>昭和館では戦中戦後の国民生活を伝える貴重な写真資料として、石川光陽が撮影した写真を数多く保管し、映像・音響室で公開しています。</p>	 <p>体調不良を理由に召集を見送られ、戦地へ赴くことができなかった風太郎。第二話『帰らぬ故郷』では、国の行く末を憂いながらも、勉学に励むことしかできない自身の無力さに葛藤する姿が描かれています。</p> <p>当時、国民全員が一丸となって戦争に勝つ体制を作るため、文化や教育、行事などあらゆる生活面で戦意高揚がはかられました。戦争中心の生活に切り替えることが求められ、これに協力しない人は非国民として非難されました。</p>
<p>東京都千代田区</p> <p>昭和20年(1945)1月1日</p> <p>石川光陽撮影</p>	<p>東京都千代田区</p> <p>昭和20年(1945)1月1日</p> <p>石川光陽撮影</p>	<p>東京都千代田区</p> <p>昭和20年(1945)1月1日</p> <p>石川光陽撮影</p>		

4.国民学校の学芸会	5.陸軍記念日	6.B29撃墜展覧会	第三話	7.東京駅での退避訓練
				
<p>学芸会で出征兵士の見送りの場面を演じている第三日暮里国民学校(現・荒川区立第三日暮里小学校)6年生の女子児童たち。</p>	<p>朝日新聞社前を行進する軍楽隊。社屋壁面に「必勝」「撃ちてしまむ」のスローガン幕が掲げられている。      明治38年(1905)3月10日、日露戦争の奉天会戦で大日本帝国陸軍が勝利を収めた。これを記念し、太平洋戦争終戦まで同日は「陸軍記念日」に制定され、各地で記念の催しなどが行われた。</p>	<p>中野松美(まつみ)伍長操縦の飛燕(ひえん)がB29に体当たりで撃墜したことを称えて、日比谷公園で展覧会が行われた。      手前は撃墜したB29の残骸を用いた実物大模型、奥が中野伍長操縦機の実物。</p>	<p>第三話「提灯行列」は、昭和20年(1945)2月、大学へ向かう途中の新宿駅で空襲に遭い、防空壕へ退避するシーンから始まります。空襲被害を最小限にいとめるため、普段から町内会組織などで防火訓練や退避訓練が行われました。また、照明の使用を制限する灯火管制や建物に防空塗装が施されるなど、空襲時に標的とならないような対策も取られていました。</p>	<p>東京駅構内で行われた退避訓練の様子。みな一斉に両手で目や耳を覆い、ホームから下る階段に身を隠している。</p>
<p>東京都荒川区</p>	<p>東京都千代田区</p>	<p>東京都千代田区</p>		<p>東京都千代田区</p>
<p>昭和17年(1942)</p>	<p>昭和19年(1944)3月10日</p>	<p>昭和20年(1945)2月</p>		<p>昭和18年(1943)8月</p>
	<p>菊池俊吉撮影</p>	<p>菊池俊吉撮影</p>		<p>石川光陽撮影</p>
8.救護訓練中の女学生たち	9.灯火管制下での夕食	10.迷彩塗装を施した大学の校舎	第四話	11.炊き出し訓練
				
<p>救護訓練で、人工呼吸法の訓練をする佐賀県立小城高等女学校(現・佐賀県立小城高等学校)の女学生たち。</p>	<p>戦時中、夜間の空襲に備え、黒い布で電灯のまわりを囲んだり、窓に黒いカーテンを引くなどして空襲の目標にならないように、わずかな明るさの中で生活をしていた。</p>	<p>外壁に迷彩塗装が残されたままの東京工業大学の校舎。戦中、隠すことができない建造物を空襲から守るため、このような塗装が施された。</p>	<p>第四話「東京大空襲」で風太郎は、東京大空襲の被害を目の当たりにします。学友の無事を訪ね歩き、その際に見た被害状況のほか、罹災者に対して行われた支援も描かれています。      昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲では、下町の住宅密集地の被害は甚大なものでした。</p>	<p>隣組での防空演習のひとつとして、非常時の炊き出し訓練も行われた。</p>
<p>佐賀県小城市</p>	<p>東京都港区</p>	<p>東京都目黒区</p>		<p>東京都</p>
<p>昭和19年(1944)5月20日</p>	<p>昭和20年(1945)1月</p>	<p>昭和22年(1947)頃</p>		<p>昭和15年(1940)9月</p>
	<p>菊池俊吉撮影</p>	<p>塚越昭治提供</p>		<p>石川光陽撮影</p>

<p><b>12.東京大空襲の被害(1)</b></p>	<p><b>13.東京大空襲の被害(2)</b></p>	<p><b>14.罹災者の洗眼</b></p>	<p><b>第五話</b></p>	<p><b>15.国策紙芝居の上演</b></p>
				
<p>3月10日の東京大空襲直後に撮影された台東区浅草の様子。 住むところを失った人びとが、大きな荷物を抱えて避難している。</p>	<p>空襲を受けた吾妻橋東詰付近の様子。あたり一帯は焼け野原となり、家財道具満載の荷車を引く罹災者が写し出されている。</p>	<p>警視庁前での洗眼の様子。空襲による煙や爆風で、眼を痛めた人びとのために洗眼所が設けられた。</p>	<p>第五話「脳中の花」では、芸術を楽しむ風太郎の姿が描かれています。新宿武蔵野館では映画「格子なき牢獄」を鑑賞し、渋谷で「古川ロッパ」の喜劇を、新橋演舞場では「六代目尾上菊五郎」の公演を見るなど、勉学に励みながらも時には余暇を楽しんでいたようです。 戦時下は芸術文化面にも統制が及び、娯楽色を極力排して国策に沿った作品がつけられるようになりました。</p>	<p>松坂屋の特設会場で「父に祈る」(軍事保護院指導・帝国画劇報国会製作)の紙芝居を上演する紙芝居師の森下貞三。 「父に祈る」は、父を戦争で亡くした少年が、母の愛情で立派に成長する様子などが描かれた国策紙芝居。</p>
<p>東京都台東区</p>	<p>東京都墨田区</p>	<p>東京都千代田区</p>		<p>愛知県名古屋市中区</p>
<p>昭和20年(1945)3月10日</p>	<p>昭和20年(1945)3月20日</p>	<p>昭和20年(1945)5月26日</p>		<p>戦中</p>
<p>石川光陽撮影</p>	<p>菊池俊吉撮影</p>	<p>石川光陽撮影</p>		
<p><b>16.娯楽街 浅草六区</b></p>	<p><b>17.福知山電気館</b></p>	<p><b>第六話</b></p>	<p><b>18.百貨店の代用品キャンペーン展示</b></p>	<p><b>19.雑炊食堂に並ぶ人びと</b></p>
				
<p>手前から東京倶楽部、常盤座。東京倶楽部にはイタリア映画「リビヤ白騎隊」、常盤座には「笑の王国」の看板がそれぞれ掲げられている。 「笑の王国」は古川ロッパが発案した劇団名で、ここ常盤座で旗揚げされた。</p>	<p>福知山市字中ノ(現・福知山市西中ノ町)付近にあった映画館。 傷痍軍人を看病する看護婦を描いた「湖畔の別れ」(昭和18年1月8日公開)と敵国スパイの暗躍をテーマにした「開戦の前夜」(昭和18年1月14日公開)を上映中。</p>	<p>第六話「学校一の幸福者」では、百貨店で貯蓄債券を強制的に購入させられたり、食糧事情の悪化によりソースで味付けした味噌汁を味わうなど、生活がひっ迫してきている状況が様々な面で描かれています。 戦局が厳しくなるにつれ、物資不足が深刻となり、配給所には長い列ができました。代用品で補うこともありました。</p>	<p>日本橋高島屋のショーウィンドウを眺める外出着姿の女性と女の子。 金属代用・皮革代用・ゴム代用と書かれた代用品キャンペーン展示には陶磁器製のやかんや漏斗(じょうご)などが並んでいる。</p>	<p>銀座三越の地下にあった雑炊食堂の、長い列に並ぶ労働者たち。 東京都は昭和19年(1944)2月、ピアホールや百貨店、大喫茶店を利用した雑炊食堂を開設した。</p>
<p>東京都台東区</p>	<p>京都府福知山市</p>		<p>東京都中央区</p>	<p>東京都中央区</p>
<p>昭和16年(1941)9月</p>	<p>昭和18年(1943)</p>		<p>昭和16年(1941)5月頃</p>	<p>昭和19年(1944)</p>
<p>日本写真家協会(JPS)提供 松田正志撮影</p>			<p>日本写真家協会(JPS)提供 門奈次郎撮影</p>	<p>師岡宏次撮影</p>

20.焼き米を求めて集まる人たち	第七話	21.空襲被害をうけた東京駅	22.焼けあとでの告別式	23.道玄坂通り
				
<p>空襲で農商務省の倉庫が焼失し、保管してあった米も焼けた。 食べられそうなものを求めて、人びとが集まった。</p>	<p>第七話『目黒焼ける』で風太郎は空襲に遭い、とうとう下宿先を焼け出されます。 昭和20年(1945)5月24日の空襲は、風太郎の住む目黒区にも戦火が及びました。翌25日深夜から26日未明にかけても再び空襲があり、東京駅や皇居周辺も大きな被害を受けたため「山の手空襲」と呼ばれています。</p>	<p>山の手空襲により東京駅も被害をうけ、駅舎3階のドームが焼失した。</p>	<p>棺の前で手を合わせる男性とその横で黙礼する人びとの姿。棺の傍に佇む女児は遺族であろうか。未明まで空襲があり、まだ瓦礫が散乱する中、棺台を畳で代用するなどして執り行われた告別式の様子が写し出されている。</p>	<p>空襲で焼けてしまった道玄坂。現在のSHIBUYA109前、道玄坂下交差点付近の様子。左手に焼け残る建物は東横映画劇場(現・TOHOシネマズ渋谷)。</p>
東京都大田区		東京都千代田区	東京都千代田区	東京都渋谷区
昭和20年(1945)5月24日		昭和20年(1945)5月26日	昭和20年(1945)5月26日	昭和20年(1945)5月31日
石川光陽撮影		石川光陽撮影	東京大空襲・戦災資料センター提供	石川光陽撮影
第八話	24.笑顔の疎開児童たち	25.疎開先での掃除の様子	26.便りを読む疎開児童たち	第九話
				
<p>第八話『愛すべきもの』では、下宿先の奥さんの実家がある山形や、自身の実家へ疎開した時の様子が描かれています。空襲による悲惨な状況を目の当たりにし、自身も罹災者となった風太郎でしたが、しばし心を休ませる機会になったようです。 疎開には、親戚を頼っての縁故疎開や、学校の先生と一緒に地方のお寺や旅館などで集団生活をおくる学童疎開などがありました。風太郎も山形の旅館で疎開してきた子どもたちに出会っています。</p>	<p>疎開学寮の朝萬(あさよろず)旅館の三階から、笑顔をみせる芳林(ほうりん)国民学校(現・千代田区立昌平小学校)の女子児童たち。自分たちで洗濯したであろう布団や衣類が所狭しと干されている。</p>	<p>疎開学寮の白山荘で庭の清掃をする杉並第二国民学校(現・杉並区立杉並第二小学校)の男子児童たち。 疎開先で児童たちは、身の回りことや授業のほか、清掃や農作業といった奉仕作業も行った。</p>	<p>別所温泉つるや旅館へ集団疎開した、立教高等女学校付属尋常小学校(現・立教女学院小学校)6年生の女子児童たち。家族からの便りを読んでいる。</p>	<p>第九話『飯田の青春』は、学友と疎開生活を始めた風太郎が描かれています。疎開先の飯田へ降り立った風太郎たちは女性駅員に出会い、色めき立ちます。 男性が召集されたため、それまで男性が担ってきた仕事を女性が引き継いで、労働力を補いました。</p>
埼玉県幸手市	埼玉県幸手市	長野県上田市	長野県上田市	
昭和19年(1944)9月	昭和19年(1944)9月	昭和19～20年(1944～45)	昭和19～20年(1944～45)	

戦時下の飯田について		27.神風の鉢巻きをした女学生たち	28.飛行機工場で働く女子工員たち	第十話		
<p>東京医科大学は、昭和20年(1945)4月13日に空襲被害を受け、同大学の2年生は6月25日に長野県飯田市へ疎開します。新宿駅を出発し、午後9時過ぎに飯田駅へ到着した風太郎たち一行は、7月から授業を再開しました。</p> <p>飯田は蚕糸業の盛んな地域で、絹製品の輸出先の大半をアメリカが占めていましたが、太平洋戦争での打撃を大きく受け、製糸工場は倒産していききました。</p> <p>戦中の飯田には、東京医科大学のほか世田谷区内の複数の国民学校が疎開し、近隣の下伊那郡大下条村(現・下伊那郡阿南町)にも千葉医科大学(現・千葉大学医学部)が疎開していました。また豊川海軍工廠の一部が飯田中学校(現・飯田高等学校)へ疎開するなど、軍需工場の疎開もみられ、その背景には閉鎖された製糸工場の活用や女工を中心とする労働力を転用できたことなどがあります。</p> <p>女優の岸田今日子さんも姉の衿子さん(詩人・童話作家)と共に縁故疎開し、飯田高等女学校(現・長野県飯田風越高等学校)に通いながら、疎開工場に学徒動員されて働いていたそうです。</p> <p>『戦中派不戦日記』には、風太郎が飯田に疎開していた頃の記述も多くあり、山中に忽然と佇む軍需工場の様子や下宿先の家財疎開を手伝ったこと、8月15日の様子などが記録され、マンガ『風太郎不戦日記』にもその様子が描かれています。</p>		 <p>作業服姿の群馬県立渋川高等女学校(現・群馬県立渋川女子高等学校)の女学生たち。3~4年生全280名が中島飛行機株式会社(現・SUBARU)小泉製作所へ動員された。</p> <p>「神風」の鉢巻きは、出撃前の特攻隊員からの貴重な献金をもとに作られた。</p>	 <p>昭和飛行機東京製作所の主翼の生産ラインで働く女子工員たち。徴兵された男性の代わりに多くの女性たちが工場などに動員され人手不足を補った。</p>	 <p>第十話『八月十五日』は、終戦を迎えた風太郎が描かれています。</p> <p>当日の『戦中派不戦日記』にも『八月十五日 炎天 帝国ツイニ敵二屈ス』と書かれているのみで、戦地に赴くことのなかった風太郎にも、降伏というかたちで終戦を迎えたショックは非常に大きかったことがうかがえます。</p>		
 <p>飯田駅 長野県飯田市 昭和18年(1943)頃 飯田市歴史研究所蔵</p>		 <p>長野県女子勤労挺身隊 (飯田高等女学校の女学生たち) 長野県飯田市 昭和19(1944)年 『目で見る飯田・下伊那の100年』, 株式会社郷土出版社, 1992, p.117.</p>	群馬県	東京都昭島市		
		昭和19年(1943)	昭和19年(1944)5月			
		塚越昭治提供	藤本四八撮影			
29.靖国神社へ参る人びと	30.皇居前広場に集まった人びと	<b>男子学生たちの青春</b>				
 <p>8月15日、ラジオを通して玉音放送が流れ、人びとは、戦争が終わり、日本が負けたことを知った。翌日、靖国神社へ参拝に訪れる人びとの姿が見られた。</p>	 <p>終戦の翌日、皇居前広場にて、ひれ伏す人びとの姿が見られた。</p>				<p>石川光陽は自身の回想録の中で、終戦翌日(昭和20年8月16日)の出来事を、このように記しています。</p> <p>…藤田警務課長は私の肩を叩いて「石川君、最後までお互いによくやったな。君も死を賭して貴重な空襲状況を撮り続けてきたが、戦戦記録となってしまうことは全く残念だな。」課長の顔には疲労の跡がみえる。「私は今皇居前に行ってきたんだが、みんな土下座して頭を深く垂れ号泣しているのを見て、私も涙してもどってきたところだが、記録の最後の一枚にそれを撮っておいたらどうかね。」</p> <p>私は早速カメラを持って桜田門を抜けて二重前橋に行った。数多くの老若男女の赤子の群れがモンペ姿や防空服で三々五々集ってきていて、宮城に向かって焼けつく玉砂利の上にひれ伏し、慟哭している。中には学生の姿や若い女性の姿もある…</p>	 <p>西京極球場(現・京都市西京極総合運動公園野球場)で第一高等学校(現在の東京大学教養学部、千葉大学医学部・薬学部の前身)と第三高等学校(現在の京都大学総合人間学部、岡山大学医学部の前身)の試合が行われた。</p> <p>第一高等学校の選手と応援する学生たちが写されている。</p>
東京都千代田区	東京都千代田区				京都府京都市右京区	
昭和20年(1945)8月16日	昭和20年(1945)8月16日				昭和15~17年(1940~42)	
石川光陽撮影	石川光陽撮影					

<p><b>32.制服姿で焚き火を囲む学生たち</b></p>	<p><b>33.夏季実習中の学生たち</b></p>	<p><b>34.出陣学徒の壮行会</b></p>	<p><b>35.万歳三唱で送り出される出陣学徒</b></p>	<p><b>36.勤労働員先で作業する学生たち</b></p>
				
<p>第一高等学校(現在の東京大学教養学部、千葉大学医学部・薬学部の前身)の学生たち。記念祭の後に行われた寮歌祭の様子と思われる。</p>	<p>夏季実習のため中島飛行機株式会社(現・SUBARU)を訪れた浜松高等工業学校(現在の静岡大学工学部の前身)の学生たち。 中島飛行機の小泉製作所で実習中であつたが、この写真は同社の太田製作所へ出張した際に撮影されたものである。</p>	<p>水天宮で行われた出陣学徒の町内壮行会の様子。多くの人びとが見送りに来ている。 出陣学徒とは、太平洋戦争末期の昭和18年以降、兵力不足を補うため、26歳までの大学生に認められていた徴兵猶予を文科系学生については停止して、20歳以上の学生を入隊・出征させたことである。</p>	<p>騎馬の上に乗る明治大学の出陣学徒。 左の扇子を持った男性は同大学の元応援団長。</p>	<p>勤労働員先の三井造船株式会社で作業に励む岡山師範学校(現在の岡山大学教育学部の前身)の学生たち。 溶接の作業中と思われ、各溶接ブースには名札が下げられ、溶接面をつけて作業している。</p>
<p>東京都目黒区</p>	<p>群馬県太田市</p>	<p>東京都中央区</p>	<p>東京都中央区</p>	<p>岡山県玉野市</p>
<p>昭和15～18年(1940～43)</p>	<p>昭和16～18年(1941～43)</p>	<p>昭和18年(1943)12月1日</p>	<p>昭和18年(1943)12月10日</p>	<p>昭和19～20年(1944～45)</p>
<p><b>37.食事をとる学生たち</b></p>	<p><b>38.建物疎開作業を行う学生たち</b></p>	<p><b>39.散髪する学生</b></p>	<p><b>40.軍事教練に参加した学生たち</b></p>	
				
<p>勤労働員中に食事をとる岡山師範学校(現在の岡山大学教育学部の前身)の学生たち。 壁に「岡師控所」の文字が見える。</p>	<p>建物疎開のため、人力で家屋を引き倒す勤労働員の東京写真工業専門学校(現・東京工芸大学)の学生たち。 戦局の長期化が予想されるようになった昭和18年(1943)、「都市疎開実施要綱」が制定され、空襲による火災の延焼を防ぐために建物を取り壊して防火地帯を作る建物疎開が全国の都市で実施された。</p>	<p>互いの髪をバリカンで丸刈りにする東京写真工業専門学校(現・東京工芸大学)の男子学生。</p>	<p>富士山を背景に記念撮影をする東京写真工業専門学校(現・東京工芸大学)の学生たち。 富士山麓で行われた軍事教練の時に撮影されたもの。</p>	
<p>岡山県玉野市</p>	<p>東京都</p>	<p>東京都</p>	<p>静岡県(推定)</p>	
<p>昭和19～20年(1944～45)</p>	<p>昭和19年(1944)</p>	<p>昭和19年(1944)</p>	<p>昭和19年(1944)</p>	